

再現屋、産声を上げる IV

46 祖母の最期

「倒れてた？ あんな吹きっさらしの場所に？」

オレの問いに叔父はすぐには答えず、石橋の上に座り込んで、鯉にやろうと持ってきた配合飼料の餌を池に投げ始めた。そういえばあちゃんはこの池の鯉をとても可愛がっていた。

「あれからもう三年も経つんだな」

叔父が呟いた。鯉たちはまだばあちゃんのことを覚えてるのだろうか。

「お前も知ってるだろう、お袋は心臓が弱くて、あの頃はもう遠出もできなくなってた。家の中でも家人の目が届くようみんな注意してたし、庭を散歩する時でも、必ず誰かがそばにいるようにしてた。なのに」

叔父は餌を一すくいすると、水面に叩き付けた。一匹の鯉が驚いて跳ね、水面が金色に輝いた。

「なのにあの日、お袋がいなくなったことに、誰も気づかなかったんだ。クソッ」

叔父の目は、池の向こう側に注がれている。まるで今もそこに母親が倒れているかのように。

「あの日は俺もこの屋敷にいて、親父と議論を戦わ

せていたんだ。いや議論にもなつてなかった。親父のヤツは、俺の持ち込む企画はどれもこれも夢みたいなものだつて、いつも鼻で笑いやがる。……まあそれはどうでもいいんだが」

叔父は腰を上げると、屋敷とは反対方向に石橋を渡つていく。オレもあとに従った。

「あの日はそれが高じて、終いには大声張り上げての大喧嘩になった。お袋のことは頭の隅っこにもなかった。お文らも俺たちに気をとられていたんだろう。夕食時になつてようやくお袋の姿が見えないと騒ぎになつて、それから上を下への大搜索が始まった。家の中には見当たらないし、念のために兄弟の家にも電話をかけてみたが、誰も所にもいない、来るといふ連絡もないという。外はだんだんと暗くなつてくる。誘拐されたのかもしれないと親父が喚きだして、ようやく警察に電話した直後、多々良が池の端、そうここでお袋が、眠るように倒れているのを発見したんだ」

叔父は一気に喋ると、肩を落とすようにして、足を止めた。

そこは屋敷から奥にある蔵へと続く小径を、少しばかり外れた場所で、芝生もなく地面がむき出しになつている。すぐ脇に梅の木が数本あり、花びらがひらひらと数枚、風に乗って飛んできた。

「その時、ばあちゃんはもう」

「ああ、事切れていた。頭を池の方にまっすぐ向けて仰向けに横になった状態で、両手は胸の上で組み合わされていた。しかもその日は夕方から集中豪雨に見舞われてな。お袋の体はぐっしより濡れていたんだ。駆けつけた医者診断では、お袋の死因が心臓の発作で倒れたからか、雨で体を冷やしたからか、はつきりとしなかった。

……それよりも、お袋が一人で庭に出た理由は、結局判らず終いだ」

オレは屋敷を振り返った。池を間に挟んで、これだけ距離があると、夕暮れ時に発見するのは容易じゃなかっただろう。

「押っ取り刀でやってきた兄弟たち、特に勘次郎兄貴の怒りようはスゴかった。なぜお袋から目を離れた、アンタが殺したようなもんだ、と親父をさんざんに非難した。俺だって口汚く罵^{のの}られた。もちろん責任を感じてたから何も言い返せなかったがな。……兄貴が涙を流したのを見たのは後にも先にもあの日だけだ。お袋の亡骸^{なきがら}にしがみついて一晩中号泣してたからな。それからだよ、勘次郎兄が親父をないがしろにするようになったのは。話をするときだって、目を合わせないし」

叔父は項垂^{うなだ}れたまま、話を終えた。

空をふり仰ぐと、雲ひとつない快晴。三年前の今日は

豪雨だったという。きつと空模様は早くから悪かったに違いない。

そんな悪天候に、どうしてもばあちゃんは一人で庭に出たりしたんだろう。

47 わがままな願い

オレと勘三郎叔父はお互いに無言のまま、池をぐるりと迂回して、屋敷のそばに戻ってきた。

すると、縁側に面した障子の陰から、手招きする白い手が見えた。

「何やってんだよ、志乃。じいちゃんは酔い潰れたか？」

「えへへ。バレたか」

志乃が舌をペロツと出して、顔を突き出した。しかし急に深刻ぶった表情になると、

「それがさあ、エラいことになってきてん」

「まさか、じいちゃんにプロポーズされたか」

「冗談言うてる場合と違^{ちや}うで。なあ、アンタの亡くなつたおばあちゃんって、忍^{しのぶ}さんて言わはるんやな。あのおじいちゃんの奥さん。判る？」

「当たり前だよ。オレの家族だから」

「そうそう、そんでおじいちゃん、昔の写真出してき

はって、見せてもらたら、むっちゃあたしに似てるやん。
ウソみたいやったわ。……でもな」

志乃はくすくす笑うと、

「あたしが赤ん坊のトシを抱いてる写真があつてんで。
なんか変やったわ。あとでコピーさせてもらおかな」

「せんでもいいから。で、エライことって？」

志乃は不審そうな目をオレの背後に向けた。オレは叔父を志乃に紹介した。叔父も縁側に腰掛けて、志乃の話に興味津々といった顔を伸ばしてきた。

オレは志乃に話の先を促した。

「それがな、おじいちゃん、あたしにおばあちゃんの服着たところ、見せてくれって言いはんねん」

オレと叔父は顔を見合わせた。志乃は眉をひそめると、
「それはちよつとどうかと思うやん、フツ―。でもさつき呉服屋の女主人っていう人が、ときどきおばあちゃんの残した衣装に風を通して来てはるらしいんやけど、その人が来たんで、ちようどええ、いっぺんあたしに着てもらおうかって。どないしたらええやろ」

志乃が訴えるような目をしたとき、座敷にじいちゃんが入ってきた。

「やあ志乃さん、待たせてすまん。あちらに用意したんで、着替えてやってくれ」

そう言いながら畳の上に座ると、志乃に向かって額を

畳にこすらんばかりに深々と頭を下げた。

「妙な話とお思いかもしれんが、年寄りのわがままじゃ。何とぞ聞いてやってくだされ」

先回りしてそう言われると、誰も文句を言えないじゃないか。

志乃も観念して、

「わかりました。やらせていただきます」

それを聞いて、じいちゃん、もうしてやっつたりの笑顔を上げた。

「俊郎、撮影部隊の出動じゃ」

「え？ 撮るの？」

「当たり前じゃ。こんな一大事、記録に残さんでどうする」とじいちゃんは鼻息荒く言い放つ。

「ちよつと悪ノリが過ぎるんじゃ……」

「カメラ返してもらおうか」

「判った判った、やりますやります」

イヤも応もない。

和装の志乃が庭を歩いている。降りそそぐ明るい陽差しを古びた傘で遮りながら、日本庭園の敷石の上をゆつたりとした足取りで進んでいく。

志乃が言うには、和服を着たのは、私生活では今日が生まれて初めてだという。しかも母親の喪服を借りて。

しかしながら舞台の上では、上品な老婦人という役柄で、何度も経験しているらしい。

オレは改めて志乃を見直した。

劇団を辞めさせられたというから、どんな大根役者なのかと思っていたが、なかなかどうして老婦人の佇まい^{たたず}や仕草が堂に入っている。

オレは無我夢中でカメラを回し続けた。

48 老婦人

志乃は決してばあちゃんを演じているわけじゃない。法要に大遅刻したので例の映像は見えないから、俄仕立^{にわかじた}ての見よう見真似もできない。彼女の演技はあくまで彼女が以前の舞台で演じた役の再演なのだ。だから彼女の演じる老婦人は、ばあちゃんとは似ても似つかない別人だ。

それでもオレは心の底から驚いている。縁側に腰掛けたじいちゃんも勘三郎叔父も「ほお」を連発している。志乃の着付けを担当した呉服屋の女主人など、お化けに出会ったような顔をしている。

誰の目にも志乃は老婦人にしか見えなかった。首の振りや手足の動きなど、初老の女そのものだ。

志乃の足が西を向いた。日傘を背中に傾けて空を仰ぐ

彼女の顔に、午後の陽光が降り注ぐ。その顔にズームインしてみる。彼女の顔だけはさっきのまま、目尻や口許に皺を書いたりなど老けメイクはしていない。もったもそんなことをしたらコントになってムード台無しだ。志乃は純粹に体の動きだけで老人に化けているのだ。

突然、彼女の歩調が乱れた。

一歩進んでは止まり、二歩進んでは体を仰け反らせる。表情は……まるで意外なものを見つけたように、凝然と空の一点を見つめたままだ。

「どうしたんじゃ？」

座布団に鎮座していたじいちゃんが膝を乗り出した。叔父もハテと首を傾げる。

志乃はポトリと日傘を落とした。草履履きの足がよろけるように進む。進むがその先には……池があるのだ。

志乃はいったい何をするつもりだ？

「吉二郎……」と、彼女の口から言葉が漏れた。

キチジロウ？ 誰？

しかし彼女の足は止まらず、池に向かって近づいていく。彼女の目は一心に空に向けられていて、少しも足許など見ていない。

「危ない！ 落ちるぞ！」

オレはカメラから目を外すと、叫び声をあげながら、志乃に駆け寄った。

志乃はオレの声が聞こえないのか、池を囲む石垣まであと数歩と迫った。オレはカメラを持つ左手と空いた右手で彼女の体を抱き留めようとした。

その瞬間、志乃の体がクルツと反転してオレの視界から消えた。オレは両手を前に突き出したままの格好で、池の中へと落ちていった。

「大丈夫？」

「ダイジョーブなわけないだろ、ツクシヨン」

春とはいえ水温はとても冷たかった。頭の先まで池の中に沈んだオレは、志乃と叔父に引き上げられ、運良く沸いたばかりの風呂へと直行した。

そんな状態なのに、探求心旺盛なオレは、志乃の行動の謎を追究せずにはいられなかった。

「ほんま、ごめんなー」

脱衣場の床に坐りながら、扉越しに志乃が語った説明によるとこうだ。

志乃がかつて舞台上演じた上品な老婦人。老婦人は夫を早くに亡くし、たった一人の息子吉二郎を戦争に取られていた。ある日老婦人のもとに、彼女の息子が鹿児島から特攻隊の一員として飛び立ったまま行方知れずとの報が届いた。その日から老婦人は、西の空を見つめることが多くなった。息子の乗った飛行機がいつか自分のと

ころへ帰ってくるに違いない。そう信じ続け、それはやがて盲信になった。彼女の境遇を哀れみ、昼も夜も徘徊する彼女の身を案じた親戚たちによつて、老婦人は自宅の敷地内に“幽閉”された。危険な池や井戸などは埋め立てられた。そんな庭で老婦人は来る日も来る日も空を眺め続け、限られた土地の中で、行ったり来たりを繰り返すのだった……。

志乃は舞台を思い出し、老婦人になりきってしまったという。ただの撮影会なのに。

「トシってスゴいわあ。池に落ちても、カメラが濡れんように手え伸ばして撮影してるしい。カメラマンになりきってたんやねえー」

49 コピーキャット

オレの池ポチャは、志乃の“演技”に騙だまされたからだ。それを脳天気「スゴい」などと言われると、いささか腹が立つ。

体が温まって、やっと余裕の生まれたオレは、戸の向こうにいる志乃に言い返した。

「いやあ、志乃サンの老婦人があんまりハマってたもんで引きずり込まれたんだよー。あ、引きずり込むって、老婦人の生きた時代と池の両方に掛けてるんだぜ。言う

な―オレも。ははは。

志乃サンが女優になり損なって、自分のことを才能がないみたいに言ってたから、どんなに下手クソなんだろうって想像してたんだけど、なんだよアレは、ウソばっかじゃねえか。オレには庭を歩く志乃サンが、本物の老婦人にしか見えなかったぞ。亡くなった息子の帰りをひたすら待ちわびる、狂おしいほどの婦人の思いが伝わってきたぞ。まさに日本アカデミー賞ものだ！

志乃サンが劇団を辞めさせられた理由だって、演技のせいじゃなくて、じつは劇団の金でも使い込んだからじゃないの？」

「トシ！」

耳を突き刺すような志乃の声が風呂場に響いた。彼女は磨りガラスを填めた入口の戸を開いて顔を覗かせている。その恨めしげな顔を見て、オレは自分が言い過ぎたことに気づいた。

「スマン。使い込んだは言い過ぎた。でもよー、あんな演技見せられたら誰だってビックリするさ。じいちゃんだって腰抜かしそうな顔して見てたんだから。オレが」
「あたしが演じた婦人は、坂本ハルさんっていう名前やってん」

「へ……それは劇中の役名で」

「実在の人物」

「實在……」

「そうや、実話やねん」

「実話……」

オレには、志乃が何を言いたいのかが判らず、鸚鵡おうむのように彼女の言葉を繰り返していた。

志乃の姿は着てきた喪服に戻っていたが、髪は結ったままだ。湯気を通してその顔を見ると、また老婦人のイメージが甦よみがえってくる。

その老婦人が実際に存在していたとは……。

志乃は遠い目をして、風呂場の天井を見上げた。

「舞台があつたんは一昨年。その頃はもう劇団のお荷物に過ぎんかったあたしに、主役の坂本ハルさんを演じろって座長が言うてきてん。それまでどうでもええ役ばっかり割り当てられてたのに、大抜擢よ。それはなんであつて言うたら」

志乃はまた目を落とす。オレは湯船に浸かったまま静かに続きを待つ。

「生前の坂本ハルさんの映像が残ってたからやねん。庭の中を一人で歩き回ってはる姿が」

志乃はとても話しにくそうだ。

「当時のあたしのアダ名は“コピーキャット”」

コピーキャット。そんな題名の映画があつた。エイリアン女優シガニー・ウィーバーとホリー・ハンターとい

うビツグな顔合わせの割には今ひとつパツとしない作品だった。しかし題名の意味は、

「模倣犯……」

「あはは、意味は全然違^{ちや}うけどな。要するに、あたしはホンマにおった人間をコピーすることしか、でけへんちゅーことよ」

オレは頭を金槌で殴られたような衝撃を受けた。

今ようやくすべてを理解した。

「それはつまり……直接にか映像かで、人物の動きを見るのができたら演じられるけど……そんなものがなかったら」

「うん、演技以前。ボロボロよおー」

なんということだ。

彼女が劇団の座長から言われた“空っぽ”とはそういう意味だったのか。そういえばあの高堂儀作だって“無理”と烙印^{らくいん}を押したじゃないか。

彼女は本当に、女優不適格者だったのだ。

50 再現ビデオ

複製^{コピー}する猫。どうにも志乃は、猫が絡まずにおられないらしい。

でも、とオレは思いついた疑問を口にした。

「演劇の世界って詳しくないんだけど、それならそれでノンフィクション・ストーリー中心に……いや専門に演じる女優を目指す道もあるんじゃないのかな」

湯気が初夏の入道雲のように、洗い場から志乃が顔を覗かせる戸の隙間へと流れていく。

「ムチャ言わん」として」と志乃は頬を膨らませて、「映像やら写真やら資料ならたんと残っております、みたいな役、おいそれとあるわけないやん。再現ビデオみたいな仕事も何本かやってみたけど、あたしとしては全然実りがなかったし」

「へえ。どんなビデオ？」

「笑いなや」志乃は猫の目のような一瞥^{いちべつ}をくれた。「痴漢^{えんざい}の冤罪を晴らすために被害者団体が作ったビデオ。あたしは毎度〃このヒト痴漢ですつ〃て叫ぶ役ばかりかし。演じるために、訴えた女性の後^{あと}つけて観察したりして」

ああ、と志乃は大きな声でため息をつく、

「ほんでもなあ、何が良かったんか、あたしの関わったビデオの裁判が立て続けに無罪になって、あたしの顔も一躍その筋で売れてしもて。イヤなもんよ〃エロエロスター〃って陰口叩かれて」

志乃の苦笑につられてオレも笑おうとしたが、額のあたりがジンジンしてうまく笑えない。

「あたしの話はもうええやん。そんなことより、あたし

の中の大疑問。誰に訊ねたらええか教えてほしいんやけど。……トシ？」

その声は湯の中に沈んでいくオレの耳にかろうじて届いたが、志乃が何か喚いた時、オレはこの日二度目の水没を味わっていた。

「湯あたりとは情けないねえ。まあ私も責任感じてるけど」

お文さんの声が聞こえる。

オレは腰にバスタオルを巻いた状態で、布団の上に寝かされていた。

鷺村家の風呂は薪をくべる昔懐かしいタイプで、温度調節が難しい。湯加減をみていたお文さんは、オレと志乃が込み入った話を始めたと思い、気を利かせて場を離れたらしい。オレも志乃がいたので湯船から出るに出不れず、まことに間抜けな話で……。

オレはガバツと跳ね起きた。

「お、お文さんがオレを運んでくれたの？」

オレの剣幕にお文さんは大きな体を仰け反らせ、
「私ひとりで運べますかいな。お嬢さんにも手伝^{てつど}うても
らいました。ちゃんとお礼言うときなさいよ。お湯の中
から引き上げてくれはったん、あのお嬢さんやから」
くっそー、エロエロスターめ。

「志乃は？」

「遅くなるからって、俊郎さんが寝てる間に、帰りはりましたわ。多々良が駅までお送りして」

その夜、携帯に電話を入れ、いちおう志乃には助けてくれた礼を言った。志乃ときたらオレの心中を知ってか知らずか、妙に口調が滑らかだ。

「今日は楽しかったわあ。でな、でな、さっきあたし言いかけたんやけど、例の“天使のプディング”が、なんで製造中止になったんか、いつ再開されるんか、責任者の人に訊いてや」

「責任者は、じいちゃんだろ。あのプリンはじいちゃん一人で作ってるからな」

「そうなんや。しもたなー直接、質問しとけば良かったなあー」

チツチツと電話越しに舌打ちする。

「近いうちにまた遊びに行かせてもらうけど、それまでに勘兵衛じいちゃんから返事もらって。頼んだよー」

モチ肌の俊郎ケン」

やっぱりエロエロだ。

二三日中にはまた遊びに行くと、志乃は電話を切る際まで、何度も繰り返した。今日は腹具合が万全でなかったので、夕食を誘われたにもかかわらず、泣く泣く辞退したのだという。食い意地の張ってる志乃にしては殊勝なことだ。やはり撮影会が応えたのかもしれない。最後には力仕事までやってのけ……。

イカン。アレは不幸な出来事だ。忘れよう。

座敷では、食事を終えたばかりのじいちゃんが、うまそうに酒を飲んでいた。

「起きたか俊郎。おまえ、タマの裏までしつかり見られたらしいな。カッカッカ」

高らかに黄門笑いするじいちゃんを、脇からお文さんが品がありませんよとたしなめる。対面で、里芋をつまみにビールを飲んでいた勘三郎叔父が笑いをこらえている。オレは拗ねた顔を作って、ドスンと隣に腰掛けた。お文さんがほかほかのご飯と味噌汁を並べてくれた。

昔からだが、この叔父は事ある毎にじいちゃんに対して真っ向から噛みつくのだが、不思議とこの家にいることが多い。他の兄弟みたいに陰にこもらないのが幸いしているようだ。

笑いの治まったじいちゃん、今度はしみじみと、

「志乃さん、なかなか愉快なオナゴやったのお。立て板に水のごとき関西弁は、清流の滝に打たれているような、

ええ気持ちにさせてくれよったわい。俊郎、お前も関西に帰ってきたんやから、ええ加減、東京言葉は忘れんな。息子らのように大きゅうなつてからでは抜けんで」

じいちゃんは気づいていない。興が乗った時だけ関西弁になる癖はオレと同じであることに。

「まあ、そのうちにね」

適当に相づちを打って、味噌汁をすすする。

じいちゃんは上機嫌の時の癖で、あご髭を左手で撫でながら、

「志乃さんは、東京で演劇をしとったらしいの。本人は端役ばかりやったと、しきりに謙遜しとったが、さぞかし舞台映えする人気者やったんやろうなあ」

オレは志乃の名誉のため黙っていた。

「しかし女優への道は断念したとも言うとった。お前と組んで仕事をする。もったいないのう。俊郎、いったいどんな仕事をするつもりや？」

「うん、いずれ構想がまとまったら相談するよ」

仕事内容については、お互い生活が落ち着いてから考えようと志乃と決めていた。しかしいつまでもプータローじゃられない。働かざる者（酒を）呑むべからず、が、じいちゃんの信条だ。

「そういえば、じいちゃん」

オレは話題を換えた。

「志乃からの伝言で “天使のプディング” はいつ再開するのかって。鷺村の洋菓子は、以前から大ファンだったらしいよ。代官山店ができた時も行列に並んだんだってさ。そもそも、そんな大人気のメニューがどうして製造中止になったの？」

オレは、ごくさりげなく質問したつもりだった。なのにじいちゃんは、口許に近づけた杯を、宙に止めたまま固まってしまった。

「どうかした？」

オレの問いかけにじいちゃんはようやく反応し、杯をコトリと座敷机の上に置くと、

「俊郎。志乃さんには悪いが、その質問には答えられん。いわゆる企業秘密というヤツじゃ。そう伝えといてくれ」

それだけ言うと、お文さんに今夜もうまかったよとねぎらいの言葉をかけて、スタスタ座敷を出ていった。

後に残されたオレは、あわてて叔父に訊ねた。

「ねえ、何かマズいこと訊いちまったかな？」

叔父は思わせぶりな笑みを浮かべて顔を上げた。

「マズい……というより、志乃さんが求めた答えは、俺を始め、兄弟たち、関係者の誰もが一番知りたがってることなのさ」

「へえー知らなかった。叔父さんたちまで理由を知らないなんて」

「親父が一人で『天使のプディング』の商品化権を押さえてるのは知ってるな？」

「うん、じいちゃんの切り札だって」

「そうだな。俺たち息子にも手の出しようがない部分だ。厄介な話だぜ、まったく」

話す叔父とオレの脇で、懽然とした顔のお文さんがやけにカチャカチャと音を立てながら、じいちゃんのお膳を片付けている。じいちゃんのいないところで陰口まがいの話を交わされることが気に入らないのだ。

「俺の部屋に来いよ」と叔父は立ち上がった。「ついでに冷蔵庫からビールを取ってきてくれ」

オレは言われたとおり両手に缶ビールを持って、陽が暮れて暗くなった縁側を歩いて行った。奥の部屋に灯がともっており、叔父が手招きしていた。

叔父が家を出るまで使っていた部屋は、お文さんの日々行き届いた掃除のおかげで、今日のようにたまに立ち寄っても、ホコリ一つ落ちてない。

「お袋が亡くなる一年ほど前、親父はヨーロッパの洋菓子協会に招待されて、三ヶ月ほど各地のお菓子工房の視

察旅行をしてきた。いろいろ収穫があったようで、うちのプリンも負けちゃおれん、ますます磨きをかけねばと話してた。そして親父はプリン作りを再開した。ところが」

叔父は缶をくいつと呷ると、暑くなつたのか寄りかかった窓を開けた。早春のほの暖かい夜気がすーっと入ってきた。叔父が学生の頃に付き合っていた数知れないガールフレンドが座つたろう、小さな椅子に腰掛けて、オレは続きを待った。

「ところがだ、再開した途端あちこちのご贔屓筋ひいきからクレームが続出したんだよ。以前とは随分味が違うつてね。俺たちは仰天したよ。なにしろ看板商品だからね。あわてて兄弟四人が雁首揃えて、この屋敷に駆けつけると、顔面蒼白の親父が怒った顔をして俺たちを待っていた。クレームと聞き、親父は先に厨房で点検を済ませていたらしい。機械が老朽化して、材料の配合にミスが出たんじゃないかという疑問をいとも簡単に否定した。それじゃ仕入れた牛乳や卵その他の材料に問題があるのかと会社が総がかりで調べたが、それもない。

最終的に親父は“天使のプディング”製造を中止した。それで事態を終息させようとしたんだ。

そんな折、いやな噂がどこからともなく湧いて出たんだ。“洋菓子界でマーケット拡大を強引に押し進める息

子たちのやり方が気に入らない会長が、プリンのをわざと変えて文句が出るようにし向けたと。製造中止はそんな会長の思惑どおりで、息子たちに、看板商品抜きで、お前たちの力だけでやってみろと言いたかったんだ」と

「そ……そんなアホな！」

「ああまったくアホな話さ。誰がそんな噂話を流したのかと出所を調べてみたら、納入する牛乳の質が低下したので前年ウチが手を切った、とある牧場主さ」

「やっぱり」オレは大げさに胸を撫で下ろした。

「まあ、出る杭は打たれるの諺ことわざどおり、この手の流言飛語は日常茶飯時さ。どうってことない……はずだった」

叔父は飲み干した缶をクシャツと潰した。

「当時、最悪と言っていいほど険悪になっていた親子関係を、その噂はド真ん中から打ち抜いたんだ。ばかばかしいと思いつながらも、ひよつとして、という疑心暗鬼が生まれた。疑う心っていうのは一度生まれると消えないもんだ。心痛のあまり、お袋が寝付いたりしたのもこの頃だった。マザコン気のある勘次郎兄貴なんぞ、親父に對する怒りが炸裂さくれつしまくりで、親父追放して“天使のプディング”のレシピを奪い取るんだと盛んに息巻いてた。口論になるたびに、親父と差し違えるんじゃないかと心配したくらいだ」

オレはだんだん気が滅入ってきた。

53 レシピ

「くだらないというか、大人げないというか」

叔父はちらとオレの顔色を伺うと、吐き捨てるようにそう言つて、離れたゴミ箱に空き缶を投げ入れた。

「親子の仲が悪いから悪い噂が真実味を帯びるわけだし、逆に悪い噂が仲違いをさらに加速させる。悪循環だな。

出る杭は打たれるの例えどおり、どんな世界でも成り上がりつてのは敵が多い。悪い噂に尾鰭おひれを付けて、何が何でもイメージに泥を塗つてやろう、蹴落としてやろうという輩やからも登場するさ。もちろん今のワシムラは上り調子だし、大衆の支持を得てるから、すぐに屋台骨が揺らぐようなことはない。ただ今日みたいに、いくら親族の前だからって、あからさまに喧嘩してるようなことじゃ見通しは暗いな。それに」

「“天使のプディング”が再開されない」と

「そうだ、そうなんだよ」

叔父は天然パーマの頭髪を掻きむしりながら、強くうなず頷いた。

「じつは勘太郎の兄貴に言われて来たんだ。お前は親父の懷に飛び込んで、それとなく親父の真意を確かめろっ

てな。でもさつきみたいに木で鼻をくくるような態度をされちゃあな」

オレは考えた。噂はあながち的を外れてはいないかもしれない。じいちゃんの性格なら、自分のプリンばかり当てにするな、自分の足で立ってみろ、そんな、獅子が我が子を谷底に突き落とすような真似をしてもおかしくない。じいちゃんりの愛のムチ。それなら息子たちにそう説明すればいいのに。

“天使のプディング”。その存在があまりにも大きすぎるのだ。越えるに越えられない壁。息子たちがどんなに頑張っても新商品を開発しても、客のお目当てはいつも天プリ。

事情を聞いてしまうと、叔父たちの言い分の方が正しいものに思える。じいちゃんが本当に自分ら親子を獅子に見立てているなら、天プリを“おあずけ”させられる消費者こそいい迷惑だ。

「これからどうなるんだろう」

「そうだな。まずは来週の会議で勘次郎兄貴の新作が議論されるだろうが、看板に取って代わるのは難しいな。なにしろいま“天プリ”は存在しない。カリスマプリンと表する向きもある。そんなものに勝てると思うか？取引先だって言うだろう。判りました新作扱わせてもらいまひよ。ところで“天プリ”はいつになりまっか、っ

て」

はあ。つくづく頭の痛くなる話だ。

「そんなわけだから、勘次郎兄貴がレシピ奪還に燃える気持ちも理解できなくは、ない」

「奪還って、レシピはじいちゃんの頭の中にしかないんでしょ。拉致して吐かせる？」

吐かないだろうなあと二人で笑った。

「レシピは別の場所にあるんだよ。俊郎は知らなかったか」

「そりゃ知らない。初耳だよ」

叔父は窓辺にもたれると、夜の庭を指さした。

「あそこにある」

「あそこって、そっちは蔵しかないよ」

「そう、あの蔵さ」

鷺村家の庭の隅っこに、江戸の頃から屋敷を遠く望むように立っている蔵。そこには代々の文書や文献、明治以後の懐かし映像が眠っているという。古くさい映像に興味がなかったので一度も足を踏み入れたことはなかったが、客観的に観ても資料的価値のあるものが少なくないと聞いている。

重要なレシピを記したものが存在すると聞いて、真っ先に銀行の貸金庫を連想したが、我が屋敷の敷地の中にあっただなんて。

「すぐそこにあるのに、誰も見ることはできないんだ。蔵の奥にあるレシピの部屋には、鍵が二つ掛かっていて、一つは親父が、もう一つは鷺村製菓の取締役会が所持している。錠前はこの二つが揃わないと開けられないようになってるのさ」

54 志乃の号泣

「なにそれえ」思わず吹き出した。「二つの鍵が揃って初めて開く扉なんて、テレビゲームじゃあるまいし。ホンマの話？」

「ウソは言うてへん」叔父も笑って答えた。「お互い合意がないとレシピを閲覧できないように仕組んだんだ。これでも親父にウンと言わせるまで説得に説得を重ねてやっと実現したんだから。親父一人がレシピを独占したまま、ある日ぽっくり逝かれた日には、目も当てられないだろ」

甘党じゃない身には、たかがプリンごときに大げさな……という気がしないでもないが。

「勘次郎兄貴の頭の中ではもう決裂してる。訴えてでも親父からレシピを、錠を取り上げるつもりでいる。ワシムラの行く末を考えれば、レシピを会社の財産にするのが妥当だとね。俺も同感だし兄弟みんなそう思ってる。」

したがって今や親父は孤立無援ってわけさ」

開け放った窓から一陣の夜風が部屋に舞い込んだ。なんだか、亡くなったばあちゃんがどこかで聞いているような気がした。生きていたら今の話を聞いて、今の鷺村家の様子を見て、いったい何と言うだろう。

「ところで、俊郎」

オレは窓の外の暗闇に向けていた目を、叔父の顔へと戻した。

「お前のお袋から、その後、連絡はあったか？」

叔父の目がそわそわしている。はーんと思った。叔父が自室にオレを呼んだのは、お袋の消息を訊ねたかったこともあったんだな。小さい頃から尖^{とんが}っていたお袋は、このフランクな三男と一番馬が合った。中学の頃には二人揃って深夜のミナミで遊び回っていて補導されたこともある。

「全然ないよ。三年ぐらい前にロサンゼルスから絵はがきが来たのが最後だったなあ」

「そうか。まだアメリカにいるのかな」

そう言って叔父は星を見上げた。

翌日は雨だったので、オレは部屋にこもって荷物を整理した。といっても東京から宅急便で送った荷物は微々たるものだ。眠っていたパソコンを机の上に広げてネッ

ト環境を整備したり、三回忌の式場で撮影したビデオ映像を読み込んで、編集ソフトの機能を思い出したりして午後を過ごした。

志乃から携帯にメールが届いた。腹の具合も良くなったという。明日行ってもええかとのお訊ねに、無理するなど返信した。

しかし志乃はやってきた。すっかり血色のいい顔色になつて。

「おばちゃん、こんちは」

「あら志乃ちゃん、いらつしゃい」

にこにこ顔の志乃を、これまたうれしそうな笑顔でお文さんが迎える。自分にも他人にも厳しいお文さんのハートを、志乃はいつの間にかガッチリつかんだようだ。

今日の志乃は元の金髪に戻り、派手なプリントのスカートに黒のVネックセーターという出で立ちだ。切り込んだ胸元から下着が見えてるぞと指摘したら、ワザとインナー見せてるんやん。これファッションやねんでーとケタケタ笑われた。

ところが。

あたしにそっくりやった忍^{しの}おばあちゃんてどんな人やった？と聞かれ、オレが思い出を紐解きながら、亡くなった時の状況まで細かく話してやると、志乃の大きな目から大粒の涙がこぼれた。

「の~~~~~」

英語で泣いてるのかと思ったら、これが彼女のノーマルな泣き声らしい。

「忍さん~~~~かわいいそう~~~~ヒクヒク」

オレの部屋でこんなに泣かれたら、お文さんが妙な誤解をする。用意しておいた鷺村製菓の最高級洋菓子詰め合わせをあわてて彼女の前に差し出す。泣き声は少しずつ治まっていった。

「このままやったら、忍さん浮かばれへんわ」

55 祖母の部屋

志乃はしゃくり上げる声とクツキーをポリポリ齧^{かじ}る音を交互に混ぜながら震える声で、

「今でもお庭の草葉の陰からジーツと見てはるんちやうやろか。泣いてはるんちやうやろか」

「ぞつとするようなこと言うなよ」

「なんでよ、優しいおばあちゃんやったんやろ。化けてでも出てきてくれたら、うれしいやんか」

そういう考え方もあるかな。

「の~~~~~」

また泣き始めてしまった。けっこう泣き上戸なのだ。ハンカチで両目を押さえて、畳の上にぺたりと座って泣

き続ける。オレがまたオロオロしていると、案の定、

「俊郎さん、いけませんよ！」

お文さんが部屋の扉を開けて、湯気の立つ紅茶を二つ乗せたお盆を片手に、怒鳴り込んできた。

「いい年^{とし}齡して女性を泣かせるなんて、恥ずかしいと思いなさい」とオレを睨みながら、盆をテーブルに置き、「まあまあどうしたの、可哀想に、せつかくのおべべにお菓子の屑が落ちてますよ。俊郎さんは私が叱ってさしあげますからね」

まるで子供をあやすように志乃に話しかけ、背中をさすってやっている。

「ありがと～おばちゃん。でも違^{ちが}うねん、あたしな、忍おばあちゃんが可哀想で～～」

「ホンマに、女のつらさは女にしか判らしません。こんなに泣いてくれはったら、きつとええ供養になりますわ」

オレだつてばあちゃんの葬儀の時は号泣したんだけど。でも一昨日の三回忌はちよつと賑やか過ぎたのかもしれない。ばあちゃんに心酔していたお文さんにとっては不本意だったかな。

ようやく泣きやんだ志乃は、もつとばあちゃんのことを知りたいと言ひ出した。するとお文さんも感極まつたように目を潤ませ、それならお見せしましょうと、志

乃の手を取って部屋を出ていった。あわててオレも後を追った。

階段を下り、お文さんが志乃を連れて向かったのは、ばあちゃんの部屋だった。

廊下と障子一枚隔てただけのばあちゃんの部屋は、まるで別の家に来たような印象を受けた。

十畳ほどの部屋の左右の壁際に並んだ書棚には、隙間なく書物が並んでいる。部屋の中央には丸い机と洋風の椅子が二脚。部屋の奥の窓際にも書き物机があり、数冊の書物と短冊が乗っていた。隅には硯や筆がきちんと置いてあった。

何枚かの短冊には、その筆によるものらしい五七五の俳句が達筆で認め^{したた}られていた。

部屋はばあちゃんの生前のままだ。塵一つないのはもちろんお文さんのなせる技。オレは懐かしく部屋を眺めたが、初めての志乃は、おばあちゃんてめっちゃ文学少女やったんやあと、口を開けたまま、ため息を連発している。

書棚の本は、俳句の単行本や『俳句研究』『俳句四季』といった雑誌などが半分を占め、あとの半分には詩集や写真集などが並んでいた。

「そーいや昨年ばあちゃんの全句集を作ってくれたんだったね。オレのところにも送ってくれた」

「はい、奥様は何度も賞をお取りになつていたし、作品が埋もれてしまうのを惜しむ声も多かったものですか
ら」

書き物机の上には、小さくて薄い手帳が積み重ねられている。

「奥様はどこへいくにも手帳を肌身離さず持つておられました。詠まれた日や場所なども句の横に書かれていて、全句集を編纂するのにとっても助かりましたよ。……ただ、亡くなられる直前の一冊だけが行方不明で。どこに紛れ込んだのやら」

お文さんは残念そうに言った。

志乃は壁に掛けてある若き日のばあちゃんの写真に見入っていたが、おもむろに顔を上げると、

「忍さんの動く映像も残ってるんですね。見てみたいなあ」

56 蔵の中

目頭を押さえながら、ばあちゃんの遺品を眺めていたお文さんは、志乃の声に、

「いいですよ。奥様のお元気だった頃のお姿をぜひ見てあげてくださいな」

そして、蔵の鍵を取って参りますから、先に庭に出て

いてくださいなと部屋を出ていった。

「志乃、どうしたよ。ばあちゃんに興味津々じゃないか」

からかい半分に言うと、志乃はこくんと頷いただけで、人差し指を頬に当てたまま、何やら物思いに耽っている。オレと志乃は玄関を出ると、庭の方に回った。今日はじいちゃんも勘三郎叔父も会社用に用事があるらしく不在だ。運転手の多々良さんも当然いないわけで、屋敷は静かだった。

池の中では鯉たちが元気に泳いでいた。それを横目に歩いていくと、志乃がオレの背中を突いた。

「忍さんが倒れてたんは、どこら辺？」

オレは池の対岸を指さした。その先にこれから向かう蔵の白い壁や瓦屋根が、木々の間、青い空を背にしてくつきりと見える。

お文さんが鍵を手にして、後ろから追いかけてきた。息が切れている。以前はばあちゃんの行く所どこへでも付き従っていたから、常に敏捷な動き、機敏なサポートが要求されたという。しかし最近は動くことがなくなつたせいか、動作が鷹揚おつようになり肉も付いた。首筋を大粒の汗が伝っている。

「ほほほ、私も年ですわ。このお屋敷も若い人がおらんようになったら、活気がのうなつてしもて。俊郎さんが

ずっと住んでくれはつたらええんやけどねえ」

「叔父さんの誰かが住むんじゃないの？」

「どうやろお。皆さんあんまりお寄りになられへんし、勘三郎さんは海外に永住するつて言うてはりますし」

お文さんはハアーツと染みいるようなため息をついた。

三人は木々の間の小径こみちを歩いて、目指す蔵に到着した。こうやって間近で眺めた蔵は意外に大きい。漆喰の白が眩しく陽光を照り返している。切妻の瓦屋根や黒地に白い線が交錯する蔵特有のなまこ壁が、江戸自体にタイムスリップしたかのような錯覚を起こさせる。唯一、土台の周囲を巡っている石垣が異色とも言える個性を主張している。

お文さんは持ってきた鍵で錠前を外すと、観音開きの分厚い扉の片側を押し開いた。俺たちは中に入った。

カビくさい臭いがツーンとするかと思ったら、存外に乾いた冷たい空気が満ちていた。さすがに立派な蔵だけのことはある。

お文さんが壁のスイッチを押すと、部屋全体が電灯の光で浮かび上がり、志乃が歓声を上げた。

部屋に所狭しと並んでいるのはスチール棚や木の棚で、古い百科事典から、書き付けを綴じたようなものまでが雑然と積み上げられている。ろくに整理されてないことは一目瞭然だ。

そんな中で異彩を放っているのが、部屋の真ん中にデ
ンと構えた8ミリ映写機である。レンズに差し向かうよ
うに大きなスクリーンが拡げてある。

映写機に近づき、傍らの机の上に置かれた丸いスチー
ル缶を取り上げてみた。表面に走り書きで「昭和四十五
年」とある。開けるとフィルムを巻いたリールが収まっ
ていた。

「この扉は何ですかー？」

志乃の声が、電灯の光が届かない奥まったところから
聞こえてきた。

「そこが問題のお部屋ですよ」とお文さんが答える。

「ほら、天使のプディング」のレシピが」

「えっ」

オレはおびき寄せられるように、その扉に近づいた。

取っ手には大きな錠前が掛かっていて、確かに二つの鍵
穴が、髑髏どくろの眼のように並んでいる。

57 秘蔵フィルム

錠前の掛かった扉は、まるでレシピを守る番人のよう
な威圧感を持って眼前に立ち塞がっていた。造りは堅牢
そのもので、かなり厚みがあるだろう。窓もないから中
の様子を伺うことはできない。

扉の向こうはさほど広い部屋じゃなさそうだ。蔵の高い天井の半分ほど、それでも充分普通の一階分の高さぐらいあって、幅も狭く、四畳半程度だろうか。つまりは物置の箱が隅っこに張り付いてるといった具合だ。

視線はまた錠前へと吸い寄せられていく。まるで二つ並んだ鍵穴の奥に誰かいて、じっとこちらを見ているような錯覚に陥る。わずかな光が錠前の縁で鈍く反射している。まさに髑髏だ。オレは背筋に冷たいものが走った。その時、志乃が右手でVサインを作って、そのまま鍵穴に二本の指を突き立てた。

「ブタの鼻くくく、アハハハハ」

オレは呪縛から解き放たれ、膝が折れた。

志乃はやっぱり無敵だ。志乃は扉にひたいを当てると、ムウーツと一声唸った。

「ナニしてるんだ？」

「念力で中のレシピアが見えへんかと思って」

冗談とも本気ともつかないことを言う。

「このお嬢さん、そないなこと、できはるんですか？」
お文さんが眉根をひそめてオレに問うてきた。

「できはらない！」

蔵の中は雑然とした中にも、それなりに秩序があるらしい。お文さんはこの棚がナニであの棚はナニと一通り

説明してくれたが、全く覚えられなかった。

「このあたりが、見つかったフィルムですわ。それじゃ私はお昼ご飯の用意に戻りますから。正午になったらお屋敷の方に戻ってくださいね」

お文さんはそれだけ言うと、蔵を出ていった。

オレは目的の棚の前に立った。

フィルムの山は予想以上に大きかった。封印してあるテープはどれも変色しており、埋もれていた期間の長さを物語っている。缶にはそれぞれ撮影年月日と簡単な内容が書かれていたが、かすれて読めなくなっているものや、記載内容が簡単すぎて何の事やら判らないものもある。この中から、ばあちゃんの映っているフィルムを選り分けるには、かなり時間がかかりそうだ。

オレは手近の一缶を持ち上げてみた。『忍・誕生日・昭和五十年』とある。テープをはがして蓋を開ける。そして用意した白手袋をはめ、慎重な手つきでフィルムを出し、映写機に装填した。

「おい志乃。試写やるぞー」

「ハイよー」

志乃は足取りも軽やかに、棚の間から飛び出してきた。上映スタート。映写機はその独特の音を立てながらフィルムを回し始めた。スクリーンにファーストカットが映し出される。

「あれ」「へえ」

のつけから驚いたのは、この蔵の入口が映ったからだ。ばあちゃんの誕生日に蔵？

観音開きの扉は大きく開けられていて、カメラは少しずつ前進していく。

やがて蔵の中に飛び込んだカメラはさらに滑らかな移動を続ける。照明スタンドがいくつか立てかけてあり、十分な明るさだ。

今よりもずっと整頓されている棚の間を、カメラはまるで飛行機のように滑空していく。カーブでカメラを倒すところなど、茶目たたまずつ気たっぶりだ。

カメラは目的地に到着し、スピードを落とした。

細かな格子模様の座布団を敷いた揺り椅子に、ばあちゃんは静かな佇まいたたまずで腰掛けていた。

鷺村忍、当時は四十歳。

「やっぱり綺麗やねえ」

58 祖母の揺り椅子

志乃は、心の底の底から湧き上がったような、深い深いため息をついた。

「あたしも、あと十年したらこんなエエ熟女になれるのかなあ……なあ？」

「なあと言われてもなあ」

四十歳のばあちゃんはまだまだ十分綺麗だし、やっぱり志乃によく似ている。だからウンと返事すれば志乃をホメることになりそうで、複雑な気分だ。ばあちゃんは生まれつき線が細く、映像は三十代前半にさえ見える。

ばあちゃんは近づくレンズに微笑みかけた。その顔の辺りに四角い明かりが落ちている。蔵の上部にある小窓が開いていて、太陽光が降り注いでいるのだ。揺り椅子の横の小机には、何冊かの本と短冊が置いてある。

「そうか。ばあちゃんは蔵の中を読書室にしていたのかもな」

「きつとそうやわ。あの椅子あっちにあつたで」

「ホント？」

フィルムは五、六分の長さだった。撮影するじいちゃんがプレゼントらしき小箱を渡し、受け取るばあちゃんの笑顔で終わっていた。

映写機を止め、志乃の案内で、ホームセンターのように様々なものをごたごたと載せた陳列棚の途切れた先まで行ってみると、あの揺り椅子が、フィルムそのままの場所に安置されていた。

そばの棚には、古い詩集や俳句の本などがズラリと並んでいる。この一角だけは、ばあちゃん専用の場所、いわば“指定席”だったんだな。

揺り椅子の背を押してみる。軽い軋^{きし}み音を鳴らして、椅子は前後に揺れた。目を閉じると見たばかりのばあちゃんの姿がオーバーラップする。

すぐ昼時になったので、お文さんの昼食を食べに戻った。志乃が美味美味と絶賛している。

「そう、奥様はあの頃、おやつ時になると蔵の中で読書をされるのが習慣でしたね。たいがいは私もお茶一式を持ってご一緒しましたよ」

「よりによって、どうして蔵なんか？」

「それにはちゃんとワケがありましてね」

「え、ナニナニ？」

志乃も身を乗り出した。お文さんはもったいぶるように軽く咳払いすると話し始めた。

「これは当時、大旦那様にお仕えしていた私の母親から聞いた話ですよ。ほら、奥様のご実家はここのお隣でしたでしょ。今は引越してしまわれたけど、忍様も旦那様も小さかった頃は家族ぐるみでお付き合っていたそうです。忍様は旦那様より二つ年下で、兄と妹のようによくお庭で遊んでおられたって。ところが旦那様が中学に進学されると、学校の友達と野球をしたりして帰宅が遅くなることが多くなって。忍様は隣との境にある低い築地塀の上に腰掛けて、旦那様が帰ってくるのを待ちな

がら、ひとり読書しているのを母はよく見かけたそうです。ちょうど蔵のすぐ東側辺りで。母はその姿がいじらしくて、蔵を開放してあげたそうです。大旦那様も構わん構わんと許可してくださいまして。それがずっと続いてるというワケなんですよ」

へえーとオレたちは相づちを打った。探せば小学生時代のばあちゃんのフィルムが出てくるかも。

「旦那様が忍様を嫁に欲しいと申されて、大旦那様が難色を示されたのはご存じですよ。まだ二人とも十代だったし、大旦那様は別のお相手を考えておられたらしく、お二人の仲をなかなかお許しになりませんでした。

だからその頃のお二人は、人目を、いえ大旦那様の目を盗んで、蔵の前で落ち合っては、木陰などで密やかにデートしていたそうです。なにしろ忍様のご実家が鷺村に恐縮して、忍様を実家の門から外へ一步も出そうとしなかったそうですから」

志乃はますます身を乗り出し、全身を耳にして話に聴き入ってる。まさかコイツ……。

59 志乃の企て

昼食を終えて、蔵に戻る道すがら、オレは志乃に訊ねずにはいられなかった。

「お前まさか、ばあちゃんを“演じ”ようとしてるんじゃないだろうな」

志乃は両手を背中で組み、胸を突き出して空を仰ぎながら、

「そうや。再現しようと思てる」平然と答えた。

「な……本気か？」

「本気やで。だってあたしにソックスなんやから、やらんかったらアホやで」

「まあオレだって考えなかったわけじゃない。三回忌のビデオだってまだ編集作業を終えてないから、いつそボーナスストラックに再現ビデオを付けたら、ウケるかなってね」

笑いながらそう言った。すると志乃は胸の前で両手を組み直し、首を横に振った。

「違ちがうな」

「違う？ 何が」

「あのな、よお考えてみい」

オレたちは池を跨またぐ石橋の上まで来た。志乃は足を止めて振り向くと、ぐいっと腕を上げて両手を絡め、屋敷に銃を向ける仕草をした。

「いま、鷺村家にとって最大の問題は？」
いきなり尋問口調だ。

「そりゃあ陰悪な親子の間柄でしょ」

「原因は？」

「じいちゃんの専横、横暴、傍若無人……」

「それ何語？ しりとり？」

「つまりは、じいちゃんのわがまま」

「じれったい。要するに“天使のプディング”でしょ」

「そうだな。来週の会議で、蔵のレシピを強制公開することになるかもしれんしな。じいちゃんは絶対に許さんだろうけど」

「そもそもおじいちゃんが“天使のプディング”作りをやめはった理由は？」

「不明」

「そう、それが“第一の謎”」

今度は右手の人差し指を立てて、オレの眼前に示す。さらに、

「おばあちゃんが池のそばで倒れてた理由は？」

「不明」

「それが“第二の謎”」

「ちよい待ち。なんだか探偵気取りじゃないか。ひよつとして謎を解こうと言うわけ？」

「……あたしな、この二つの謎って、どっかでつながってると思うねん」

驚いた。いきなりとんでもないことを言う。

「その根拠は？」

「あらへんよ」

今度は威張るように反り返ったよ。

「それもアレか、例の“女の勘”？」

「当たり前。アンタもだいぶあたしの性格が飲み込めなかったやん」

はあ。

「んで、それとばあちゃんを再現するのと、どう関係してくるんだ？」

「クククク」

今度は口を押さえて忍び笑いを始めたぞ。この女優くずれは、まだまだ得体が知れない。

「あんねんあんねん、関係あんねん」

だんだん笑いが止まらなくなったらしく、体を折りながら、オレの胸を拳で連打する。オレはまた池に落ちたりにしないよう、足場を確認してから、志乃の拳をつかんだ。

「ひとりで盛り上がってないで、ちゃんと説明してくれよ。いったいどう関係するんだよ」

「ムフフフ。あいな」

五分後、志乃の話を聞き終えたオレは、そんなの無理だ、と心の中で叫びながらも、大いに興味をそそられていた。それは否定できない。

「やってみる価値あるやろ？ そやから早^はよ蔵に戻って、フィルム続き、見よくや」

60 下準備

志乃に急かされて蔵に戻ると、オレは言われるまま次々と古いフィルムを映写機に掛けていった。

志乃の要望により、比較的、最近の時代のフィルムを観るようにした。

後でビデオに収録するときの利便性を考え、オレはメモ帳を片手に、内容を逐一記していった。

志乃は志乃で、在りし日のばあちゃんの姿を頭の中にダビングしてるのかと思うほど、瞬^{まばた}き一つせずに画面を睨み続けている。

保存されていたばあちゃんの記録は、驚くほど広い年代が収められていた。その中にはフィルム缶の記載が消えてしまつて、掛けてしばらくは、いつの頃の誰を映してるのか判らないのもあつた。

その映像は屋敷の池を真ん中に、石垣から水面に身を乗り出した二人の子供が映っていた。最初は叔父たちかと思つて、フィルムを変えようとしたが、片方が女の子であることに気づき、見ているとまさに仰天、なんと少女時代のばあちゃんだったのだ！ 大旦那様と呼ばれるじ

いちゃんの父親がこっそり撮ったものに違いない。石垣を支えに微妙なバランスで水面に乗り出した二人の愛らしいやりとりが遠目に見ても微笑ましい。オレも志乃も見とれずにはいられなかった。

掘り出されたフィルムは多岐に渡り、ばあちゃんを撮影したものは、そのごく一部だ。もっと他のフィルムも観てみたい、オレが生まれる前の屋敷や、当時の生活を覗いてみたい、そんな欲求がむらむらと湧いてきたが、今はそんな余裕はない。志乃がばあちゃんに成りきるまで、繰り返し同じ映像を観る必要があるし、実際に再現する時のシナリオを書くという大仕事が待ち構えている。すべてのタイムリミットは来週の会議の日。

初日が暮れる頃、オレたちはくたくたに疲れきっていた。志乃にどんな感じかと問うと、充血した目でウインクを返してきた。

志乃ならきつとやれるだろう。あの老婦人を演じてみせた際の迫真の演技を思い出せば、信用していいだろう。ただ一つ不安がある。再現して見せる相手が、ばあちゃんをよく知っているということだ。そんな相手に対して、迫真の演技どころでは通用しないんじゃないか。演じる志乃がばあちゃんに似ているのが救いだが、果たして志乃は、大和撫子のような忍ばあちゃんに成りきることができるか？

午後八時をまわり、オレたちはひとまず初日を終えることにした。蔵の前で疲れた背筋を伸ばしながら、思いついた質問を志乃にぶつけた。

「なあ、メインは晩年のばあちゃんだよな」

「そやで」

「てことは、やっぱり老けメイクが必要だよな。それは大丈夫？」

すると志乃は江戸っ子がやるみたいに、手のひらで額をポンと叩き、忘れてたあーと吠えると、携帯電話をホルダーから取り出して、どこやらに掛け始めた。

「あ、もしもしコウちゃん？ 御無沙汰。元気にしてるかー？ 何よ何よ、忘れたりしてへんがなー。あたし？ あたしはモチロン元気丸出し。快食快眠快便の毎日でっせー。アハハハハ」

いやはやどうにも。電車の中では絶対に電源を切らせよう。

「じつはな、コウちゃんに助けてほしいことがあんな。今度の週末、空いてる？ いやいや、今すぐ来られてもまだ準備できてないから。ウン、ウン、そう、ありがと、助かる、ほな待ってるでー」

電話を終えた志乃は、うれしそうに顔を上げた。

「コウちゃんに頼んだから、もうカンペキや」

「誰？ 何する人？」

「トシは一遍いっぺん会あうてるで。ほら、東京駅まであたしらを
送おくってくれた男の子おったやん。彼がコウちゃんこと村
木功いさおクン。若いけどメイクは超一流の腕前やねんで」